

「成田と羽田がセットで需要に対応」

■成田国際空港会社・藤井直樹社長

成田国際空港会社（NAA）の藤井直樹社長は25日の会見で、成田空港の役割、滑走路延伸・新設による容量増加について改めて説明した。藤井社長は「日本の首都圏の空の玄関口としての役割は、成田空港と羽田空港で担っている」と言及。海外の首都圏空港の事例や、成田が国際線／羽田が国内線という役割分担のもとで運営された時期があったことも踏まえつつ、「国際航空需要が増加する中で、羽田空港も国際線のキャパシティを増やしてきた。成田空港と羽田空港はセットと考えている」と説明。インバウンドを中心に今後も需要の伸びが想定される中で「成田空港の機能強化に伴う年間発着容量50万回化（現在は34万回）と、羽田空港の50万回を合わせた100万回で、しっかりと需要に対応するとともに、近隣アジア諸国の空港間競争に伍していける」と語った。



藤井直樹社長

走路が4000メートル、B滑走路が2500メートルとなっているものが、このうちB滑走路が3500メートルとなる。現在の滑走路の長さを踏まえると、大型機はどうしてもA滑走路を使用するという傾向にある。B滑走路が3500メートルになることで、そういった制約が緩和されるという意義はある。ただし、C滑走路が整備されて初めて発着容量が増加するということであり、B滑走路延伸によって便数が増加するということにはつながらない。

▷（空港運用状況について）中国線の5月の状況は、旅客便発着回数は45%減、貨物便発着回数は1%減となっている。中国線旅客便の減便が始まった時期から同じ傾向をたどっており、旅客は減っているが貨物は減っていない。国際線貨物便を方面別に見ると太平洋線が22%増となっているほか、アジアの国際貨物便も増加基調にある。北米とアジアそれぞれ堅調な経済状況にある中で、成田空港が北米とアジアを結ぶハブとしての役割を担うことができているのではないかと認識している。

藤井社長の会見要旨は次のとおり。

▷（就任してからの1年を振り返って）あっという間の1年だった。世の中でもいろいろなできごとが発生し、そのなかで先日発表した決算を踏まえても、健全な財務基盤を維持しながら、旅客、貨物需要に応えることができていると考えている。将来に向けて、滑走路整備、施設リニューアルなどをさらに進めていかなければならない。しっかりと各種施策に取り組んでいく。

▷（成田空港の役割と機能強化について）成田空港は首都圏の空の玄関の一つ。成田空港と羽田空港で合わせてその役割を担っている。世界の首都圏の空港では一方の空港が国際線、もう一方の空港が国内線といった役割分担もあり、日本でもかつてそういった時期もあったが、国際航空需要が増加する中で、羽田空港も国際線のキャパシティを増やしてきた。成田空港と羽田空港はセットと考えている。時代によって成田と羽田のどちら（の発着容量）を増加させるか、変遷を経てきた。羽田空港はC滑走路、D滑走路が整備され、さらに

は（都心）上空通過という新しいルートを設定することで発着容量を増やした。

▷こうした施策のもとで羽田空港の年間発着容量は約50万回となっている。成田空港は34万回だ。羽田空港の容量をこれ以上増やすのは難しいという航空当局の考えがあるなかで、日本政府としてのインバウンドの目標も掲げられている。需要は増加基調にあり、成田空港で容量を増やさなければひっ迫してしまう。成田空港は新滑走路整備で年間発着容量（34万回）が50万回に増加する。羽田空港の50万回と併せて100万回となる。しっかりと需要に対応できる状況をつくりだすこと、国際的な競争という観点からも近隣アジア諸国の空港間競争に伍していけること。そういったところにC滑走路整備の意義がある。

▷2029年度内にB滑走路を先行供用したいということを国や地元自治体に提案しているところだ。関係者のリアクションを受けての話になるが、われわれとしてはB滑走路延伸部が先行供用されることで、現在はA滑